

一癖も二癖もある探偵

今回は、個性豊かで魅力溢れる探偵が登場する小説を紹介します。

1冊目は、榎田ユウリ/著『妖琦庵夜話 その探偵、人にあらず』です。

「妖人」。それは突如現れた妖怪のDNAを持つ、人間とよく似ていても人間とは全く異なる存在。主人公である片目を隠した青年茶道家・洗足伊織もその一人で、容姿端麗にして頭脳明晰な厭世家。実は、彼には人間と妖人を見分けることのできる特殊な能力があります。その力を頼りに、彼のお茶室「妖琦庵」には、警視庁ヒト変異型遺伝子保有該当者対策本部・通称“Y対”からの協力要請が後を絶ちません。

そんなY対のベテラン刑事ウロさんと新人刑事脇坂は全くもって正反対。片や絵に描いたような叩き上げ刑事、片や天然乙女系男子。次々と起こる奇怪な事件に、伊織の助けを借りつつ繰り広げられる、彼らと妖人たちとの掛け合いが見どころです。

2冊目は、藤木稟/著『陀吉尼の紡ぐ糸』です。

舞台は昭和9年の浅草。神隠しの謂れがある銀杏の古木の下で、男性の死体がこちらに手招きしていたという通報が入ります。すぐに警察が駆けつけるも、そのような死体は影も形もありません。

この奇怪な事件取材するため、新聞記者の柏木は現場の近くである吉原へ赴きます。そこで出会ったのが、吉原の顧問弁護士でもある、美貌で盲目の探偵・朱雀十五。この朱雀という男、なかなかどうして切れ者で、開口一番から柏木は一蹴されてしまいます。そのうえ、調子のよい性格の毒舌家で、生真面目な柏木とは正反対。果たして、二人は神隠しの真相に辿り着けるのでしょうか。

大正から昭和に移り変わる危うい時代。花柳界を舞台に、まるで異界と現世を彷徨っているかのような妖しく華やかな雰囲気が魅力的な一冊です。

3冊目は、神永学/著『心霊探偵八雲 赤い瞳は知っている』です。

大学2年生の小沢晴香は、とある相談をするため、知人の紹介で同じ大学に通う八雲を訪ねます。ところが、この八雲が驚くほどの変わり者。鳥の巣頭の気難しいこの青年は、映画研究同好会の部室を好き勝手に使い生活しています。

晴香の依頼を不承不承引き受ける八雲でしたが、ひょんなことから晴香に自身の秘密を知られてしまいます。それは、彼の瞳は“この世のものではないもの”を映すということ。

事件を追うにつれ紐解かれてゆく、八雲の出自の秘密とは…？

図書館には、この他にも探偵小説がたくさんあります。ぜひ図書館にお越しください。